

2021年12月26日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ルカ福音書2章21～38節

説教題：祈りの祝福

前にもご紹介しましたが、先日、ある方が、ある場所で私を見つけて話しかけて来て下さいました。その姉妹は、ご自分の証しをして下さり、祈りによって神様の様々な恵みを見せられて来たことを話して下さいました。「この信仰は本物ですよ」、新興宗教を経験された方だからこそその言葉だと思いました。そして「お母さんはいかがですか」と聞かれました。私が2～3年前に「母の救いを祈っています」と申し上げたのを覚えていて、祈って下さっていました。他所の教会員の祈りの課題をこんなに黙々と祈って下さっている方がいるのだと、信仰の励ましを頂く思いでしたが、その方の顔は、信仰の力に満ちているように感じました。祈りは、祈っている人に信仰による力を与えて行くのだと、そんなことも思わされたことです。皆さんも今年、様々なことを祈って来られたことでしょうか。牧師のことも祈って下さいますこと、本当にありがとうございます。皆様の祈りによって、私も前に歩くことができます。

今朝の箇所—(22節以降)—は「シメオンの讃歌」として有名な箇所です。初めに記事の背景を確認します。イエス様が生まれてから40日が経った頃でしょうか、ヨセフとマリヤは赤子のイエス様を連れてエルサレムの神殿に詣でました。目的は「マリヤの産後の聖め」のためと「イエスを神に捧げる」ためです。ユダヤの女性は子供を産んでから40日が過ぎた時、聖めの儀式を行いました。また生まれた子供は、長男は神に捧げるものとされました。しかし本当に捧げてしまったら、家に子供がいなくなりますから、通常は長男を捧げる代わりに5シェケル—(10万円位)—捧げて子供を贖った—(買い戻した)—のです。それが律法の定めでした。そのためにヨセフとマリヤ、赤子のイエス様が神殿に行きました。するとそこにシメオンとアンナという老人がいました。アンナは84歳、シメオンも高齢だったと思われま。そのシメオンがイエス様を見て語った言葉がこの個所の主な内容です。それは何を教えるのでしょうか。2つのことを申し上げます。

1：「シメオンの賛歌」～祈りの恵み

25節から、「そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい、敬虔な人で、イスラエルの慰められることを待ち望んでいた。聖霊が彼の上にとどまっておられた…シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。『主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです』(2:25,28～30)。イスラエルは長く外国の支配下で惨めな状態でした。その中で人々は、様々なイメージで、ユダヤの栄光が回復されることを待ち望んでいました。その中に全身全霊を打ち込んで、神様が何かを始めて下さることを祈り続ける人々がいました。シメオンやアンナもそのような人でした。シメオンはイエスを見て喜びます。彼はイエス様を見た時、その赤子が神から送られた{主のキリスト(救い主)}であることが分かりました。つまり、神がイスラエルの民に—{31節では「万民(全ての民)」が視野に入っていますが—いよいよ癒しの業を、救いを始めようとしておられる、そのことが分かったということです。彼はそれを喜んだのです。

しかし、なぜシメオンは、赤子のイエスを見ただけでそのようなことが分かったのでしょうか。25節に「聖霊が彼の上にとどまっておられた」(25)とあり、26節には「聖霊のお告げを受けていた」(26)とあり、27節にも「御霊に感じて宮に入ると」とあります。何よりも聖霊の示しによることだったのです。しかしなぜ、彼はそれほど御霊に満たされていたのか、神の近くにいたのでしょうか。彼の側の理由もあつたのではないのでしょうか。それは、彼が祈っていたということです。「待ち望んでいた」(25)というのは「祈りつつ待っていた」ということです。ある英語の聖書は「祈りに満ちた期待に生きていた」(メッセージ訳25)と訳しています。

「靴屋のマルチン」という話があります。この教会でも数年前のクリスマスに子供達が劇をして

くれました。マルチンは、妻も一人息子も亡くして、神に失望して過ごしていました。そんな時、友達が訪ねて来て聖書を読むように勧めます。マルチンは、聖書を読み、祈ることを始めました。「神様が本当にいるのなら、私のところに来て下さい」。そんな中で神の声を聞くのです。「わたしは、明日、あなたの家に行くよ」。次の日になりました。窓の外を見ると雪かきの老人が疲れている様子でした。マルチンは家に呼んで、熱いお茶を出して上げました。今度は、赤ちゃんを抱いた女性が震えながら立っているのが見えました。マルチンは家に入れて、パンとスープを出して上げ、上着も上げました。次はリンゴ屋のおばさんがリンゴを盗んだ男の子を叱っているのが見えました。マルチンが代わりにお金を払って上げると、男の子はおばさんに謝り、2人は仲良く帰って行きました。やがて外が暗くなり、マルチンは祈りました。「神様、どうしてお出でにならなかったのですか」。その時、マルチンは神の声を聞きました。「マルチン、わたしは今日、あなたに会ったよ。雪かきをしていた老人も、女の人と赤ちゃんも、リンゴ屋のおばさんと男の子も、みんなわたしだったのだよ」。マルチンは喜びました。「私は神様に会ったのだ」。マルチンが開いていた聖書には次の言葉が記されていました。「これらのわたしの兄弟たち、しかも最も小さい者たちのひとりにしたのは、わたしにしたのです」(マタイ 25:40)。そういう話です。トルストイは、この話に色々なメッセージを込めていると思うのですが、私が申し上げたいのは、マルチンは、祈りを通して神に近づき、神に触れたということです。旧約の預言者達も、祈りを通して御心に触れました。

シメオンも祈っていたのです。イスラエルが慰められること、救われることを、何年も、何年も祈っていたのです。「神の慰めは、救いはどこにあるのか」と言いたいような辛い日々の中で、祈りつつ待ったのです。それは、どんなに人間的な制度が整っても、繁栄しているように見えても、神が関わって下さらなければ、神の救いが来なければ、本当の祝福は来ない、全ては虚しいからです。以前「クリスマス休戦」の話をしました。神が関わって下さるなら、戦場の真ただ中で和解が起こるのです。私達の教会でも、クリスマス祝会でプロジェクターが壊れて、私は大慌てをしたことがありました。しかし、主が関わって下さるなら祝福の集会が出来ることを経験しました。神が関わって下さるかどうか、それが全てだと思います。彼は、それが分かっていたから祈ったのです。祈って、祈って、神の救いを待ち望み、祈りの中で神に近づいたのです。だから赤子のイエス様の中に—{イエス様は何も語らない、何も知らない。しかし神は、独り子を人の世に、人の子として生まれさせたのです。この何も知らない、何も語らない幼子イエスの存在そのものの中に、神様の人間に(私達に)対する憐れみ、私達を救うという篤い意志が現れていた、その}—神の救いの思いを、シメオンは見る事が出来たのだと思います。

その意味でこの箇所は、祈ることの大切さを語るのではないのでしょうか。アンナも、84歳の今日まで神殿で祈って過ごしていたのです。だからイエス様のことが分かったのです。祈ることによって私達は、自分で気づこうが気づくまいが、神に近づくのです。祈りに生きたこの2人こそが、救い主の誕生の意味を最初に理解して、喜ぶことができたのです。

神学者ヘンリ・ナーウエンは言いました。「どんなにキリスト教的な言葉を語っていても、キリスト教的な行いをしているように見えていても、祈っていない人がいる。祈らなかつたら全てが空しい。それは信じていることにならない…信仰とは祈りである」。祈りに励みたいと願うことです。

ただ、もう一步踏み込んで考えたいのは祈りの内容です。シメオンは、イスラエルの慰められることを祈っていました。つまり—(自分のことだけでない)—同胞のために祈ることを生きることにしていたのです。アンナもそうです。おそらく23~24歳でやもめになって、60年間、女1人で生きて来たのです。当時、それは大変なことだったと思います。女性には仕事などないのです。しかし彼女の関心は、自分のことに始終していないのです。同胞の上に神の贖いの出来事を待ち望んだのです。そのことは私達に対するチャレンジです。私はどれだけ心を砕いて執り成しの祈りをしてるか、それが問われます。

「百万人の福音」に豊田信行という先生が、お父様のことを書いておられました。土曜日の夜に

なると伝道者だったお父様は、山に登り、大阪の街を眼下に見渡せる崖の手前でひざまずいて、夜を徹して日本の救霊のために叫び続けておられたそうです。そして祈りながら召天して行かれるのです。こんな器によって日本は神の祝福を得ているのではないか、と思わされました。私達には、こんなスケールの大きな祈りは難しいかも知れません。しかし家族、隣人のためには、祈りを導かれるのではないのでしょうか。

「愛は祈りから始まる」という言葉があります。私達は愛することを大事に考えます。それが人間関係の祝福の原則だと信じます。また、家族、隣人への愛に生きる時、本当の満足、祝福ももらうのです。しかし信仰者が「愛する」という時、それは、まず祈ることから整えられて行くものではないのでしょうか。聖書に「ある人々が中風の人をイエスのいらっしゃる家に運び、群衆で中に入れないので、外から屋根に上り、屋根をはがしてイエス様の前につり降ろした」という記事があります。その祈りに答えてイエス様が中風の人に業を為さるのです。シメオンも、祈りの中で悲しむ人、苦しむ人々を神の許に運んだのです。その祈りに神が応えて、救い主を送って下さったのです。もちろん、私達は自分のことも祈ります。その祈りは切実です。ある神学者は「最大の罪は祈らないことだ」と言いました。自分のことも熱心に祈りましょう。でも「祈るということの大切な一面は、誰かのために執り成すことではないか」ということも教えられます。

私は今年、思いもかけず虫垂炎を患いました。痛い経験でした。しかし、祈って頂ける恵みを改めて実感させて頂く経験でもありました。私達には、自分では祈る力もないということがあります。でも誰かに祈ってもらっている、神の祝福を取り次いでもらっている、それは本当に感謝なことです。教会の交わりは、一見淡泊です。しかし、日々の祈りの中で教会の仲間を覚えて祈る、あるいは、そのご家族の必要を覚えて祈る、祈りの中で誰かを神様の許に運ぶ、神の恵みを、助けを執り成す、そこに教会の交わりの祝福はあるのではないのでしょうか。その中に置かれることは幸いです。

そのように祈りに生きた結果、シメオンは言いました。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます」(29)。シメオンは、祈りに励んで来たからこそ、その生活がいよいよゴールにたどり着いた、目的を果たしたという満足感で満たされたのではないのでしょうか。ある牧師が言いました。「祈りの中に年老いて行く、それが信仰者の姿だ」。祈りに生きること、そこに人生を満たされたものとして仕上げる秘訣があるのではないのでしょうか。

2:「マリヤへの預言」～クリスマスの恵み。

シメオンはマリヤに言いました。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れ、また、立ち上がるために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。剣があなたの心さえも刺し貫くでしょう。それは多くの人々の心の思いが現われるためです」(2:34～35)。暗い響きの言葉です。しかしこの言葉は、イエス様の生涯に関して重要なことを語るのです。イエスが地上に来られたことによって、イスラエルの人々は—(全ての人々は)—「イエスを信じない者」と「信じる者」とに分けられるのです。(イエス様が分けるわけではない。人が自分でどちらかを選び取るのです)。そしてイエス様は、「信じない人々」によって拒否され、十字架で殺されて行くのです。そのことがマリヤの心を刺し貫くのです。

しかし、これはマリヤだけの痛み、悲しみではありません。他ならぬ、神様の痛み、神様の悲しみをも表現する言葉です。ヨセフとマリヤは、律法に従ってイエス様を捧げ、また買い戻す手続きを取りました。しかし、実はここで神様は、この両親を用いて本当にご自分の独り子を捧げておられるのです。何のためでしょうか。

「多くの人々の心の思いが現われるためです」(35)とあります。イエス様を十字架に架けるのは人々の罪です。十字架は、人の持っている罪が現れた時でした。多くの人々が、ある意味で、自分の罪のために、神の前につまずくのです。倒れるのです。しかしここに「多くの人々が倒れ、また、立ち上がるために…」(34)とあります。「倒れた人が立ち上がらせられる」という読み方ができます。

イエスの十字架によって心を刺された人々が、自らの罪を認め、心を低くした時、神に全ての罪を赦され、神によって立ち上がらせてもらうのです。神と和解するのです。立ち上がった人々はどのようなのでしょうか。シメオンは、そこに何を見ているのでしょうか。

少し節が前後しますが、シメオンは言いました。「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます」(29)。「もう死んでも良いです」と言ったのです。なぜでしょうか。神が人の世に救い主を送って下さった、そのことの満足もあつたでしょう。しかしシメオンは、救い主が彼の死にも平安を与えて下さることを見ていたのではないのでしょうか。前にも言いましたが、楽しい旅行をするためになくてはならないものは、帰る所です。帰る所のない旅は放浪です、悲惨です。帰る所があるから、旅を楽しめるのです。人生は旅に譬えられます。旅であれば帰る所が必要です。帰る所がなければ、地上の人生が終わった後はホームレスです。イエス様を信じる者には、地上の生涯が終わった後にも帰る所が備えられるのです。だからこそ、地上の生涯を希望に支えられながら過ごせるし、地上の生涯を平安の内に終えることができるのです。

シメオンの預言は、一見、暗い響きの預言です。しかしそこには、神の犠牲によって、イエス様の十字架によって、私達にどんな恵みが与えられたか、その大きな祝福が語られているのです。クリスマスが一番のプレゼントは、イエス様です。そしてイエス様の十字架と復活によってもたらされた天国の希望ではないのでしょうか。そして、それは地上の祝福でもあります。私達も、地上生涯で色々な状況の中でつまずき、倒れるようなこともあると思います。しかし、私達は「御手の中にあるなら十字架には復活が続く」と知っています。そこにも神の御心があると知っています。であれば「神はこの状況も永遠の観点から見た益(善)に変えて下さるに違いない」という希望の中を生きることができるのではないのでしょうか。そこで身を低くして、十字架を見上げる時、神様が立たせて下さるのです。

3: 最後に

新しい年が始まります。新しい年、祝福もあるでしょう。しかし闘いもあるかも知れません。失望することがあるかも知れません。しかし私達には、祈るという道があります。神の恵みがあります。祈って神の御業を待ち望みましょう。神から来る望みに生きて行く1年でありたいと願います。